

白い航跡 上・下

吉村 昭著 新装版 講談社 2009 (講談社文庫)

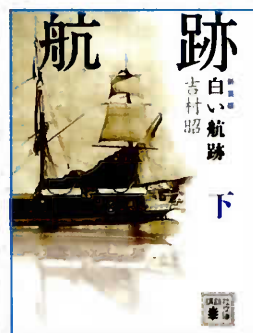
文学部教授 斎藤 達哉

南極大陸に“Takaki Promontory”という岬がある。南極大陸にはビタミン研究にゆかりのある人物名前を冠した一連の地名があり、“Takaki Promontory”は日本人医師・高木兼寛(たかきかねひろ) (1849-1920) にちなんで、英国南極地名委員会が1959年に名付けたものだ。日本では、当時も今も高木兼寛なる人物を知る人は少ない。

吉村昭『白い航跡』は、高木兼寛の「伝記」である。欧米では知られていても、日本では忘れられてしまった人物にスポットを当てたものだ。高木は20歳で薩摩藩医師として戊辰戦争に従軍。そこで西洋医術に出会い、海軍軍医として念願の英国留学を果たす。帰国後は、当時原因不明の病とされていた「脚気(かっけ)」の予防に大きな足跡を残しただけでなく、病院と医学校を創立し近代医学の普及に貢献した。明治21年には、日本で最初の医学博士を授与されている(専修大学創立者の一人である田尻稻次郎も、この年に日本で最初の法学博士となっている)。

『白い航跡』の中で注目されるのは、何と云っても森林太郎(鷗外)との「脚気」の原因説をめぐる論争である。森は、東京大学医学部で学びドイツで医学を学んだ気鋭の陸軍軍医であった。当時の医学界では、脚気は原因となる細菌があると考えられていた。森も細菌原因説を追求したため、陸軍の脚気患者を減らすには至らなかった。一方、臨床に重きを置く医療の立場から高木は、海軍の食事を米飯からパン食に変えることで脚気患者を激減させた。

脚気との戦いは、森の完全なる敗北であった。「森鷗外」というと、現代ではまず文豪として知られ、陸軍軍医総監にもなった多才な人物と捉えている。そうであるから、森鷗外と論争をして勝った高木の姿に痛快さを感じるという人も多いだろう。この伝記の主人公は高木なのだから、「第一次の読み」としては、それで十分だ。私自身、『白い航跡』を「高木の伝記」以上のものとは見ていなかった。私が高校の教師をしていたときには、国立大学の医学部を



第一志望としていた生徒が、不本意ながら私立大学の医学部に進むことになった場合に薦める本であった。高木が医学校を創設したように、私立大学には創立者の熱い想いが脈々と流れている。それを感じながら学生生活を送ってほしいという気持ちからであった。

私の中に違った視点が芽生え始めたのは、その後、役所勤めをして国語施策に携っていたときである。臨時仮名遣調査委員会、臨時国語調査会に関わっていた森林太郎について調べる中で、『白い航跡』のことを思い出した。高木ではなく、森を軸にして読み返したとき、以前と全く違うものを感じた。この時、私自身、研究者の立場と行政の立場の狭間で迷走していた時期であった。それゆえの“深読み”かもしれないが、自説を固く信じて突き進む森の姿に胸の痛みを感じたものだ。

そして今は、高木と森どちらもが「進むべき道を正しく進んでいた」という想いをもって読み返している。ノーベル賞を受賞した細菌学者コッホですら脚気の原因は細菌だと見ていた時代である。森は最先端の医学者であるとともに、当時第一級の知識人であった。高木は、対処療法ではあるけれど、医療にとって欠くことのできない「病気を診ずして、病人を見よ」という考え方を貫いた。

私の“読み”を書きすぎると、先入観を与えることになるのでこれ以上は書かないが、みなさんはどのような“読み”をするだろうか。そして、その“読み”が数年後にどのように変化をするだろうか。読書という行為によって、自分以外の人生を知るだけではなく、自分の変化をも知ることができる。みなさんには“読み”の変化を味わえるような人生をおくってほしい。